

題名 「カメラは 健康器具」

清水健二

私は自然科学を学び、仕事の上でも理系の人達との交流は日常的だった。文系の人達とは飲み友達が多く物事に対する発想が違って、色々刺激を受けることが多かった。それが生きていく上で清涼剤のような働きをしてくれたように思っている。

サラリーマンとして現役の頃から趣味で彫刻をやってきたが、もの作りが基本的に好きだったことが今も続いていると思っている。彫刻と同じくらい長く写真をやってきたし、彫刻については既にご紹介してきたので、今回は「カメラは 健康器具」と題して書いてみたいと思う。

中学、高校その後もよく映画を観てきて、今も記憶に残るワンシーンが多く、自分もいつかあんな感動的な写真を撮ってみたいという念いが若い時から潜在していた。

意外と写真好きな人が多いのは、家族や友人達とのふれあいや、旅行の楽しさ等の記録を残すのにとっとり早い手段の一つだからだろう。最近ではスマートフォンの性能向上で、きれいな写真が撮れ、低コストで交信しあって楽しめるから気軽にシャッターを押すことが多くなったと言えるだろう。しかし改めて他人様に観てもらえそうな写真を撮るとなると、それなりにセンスのあるものや、感動してもらえる写真が求められるから容易でないと思う。

写真仲間と勉強会や発表会、コンテストに応募したりしながら、互いに刺激があっても、他人様から好評を頂ける作品は、数少なく 難かしいものだと痛感しているからである。

画家は自分の感動を伝えるため、構図を決め、自分流のタッチや好みの色彩を使って表現しようと努めるが写真は なかなかそうはいかない。それでもフィルムカメラの時代は、暗室にこもって自分なりの作品にしようと、修正・加工をしたものである。近年デジタルカメラになってから暗室に入らなくても、パソコンを駆使して創作でき易くなった。何よりカメラの性能が格段に進歩し、ピントも露出も自動化し、ISO 感度はフィルムのそれより桁違いに高く、暗がりでもストロボ発光しなくても写せるばかりか、決定的瞬間の写真も、連続コマ撮影が可能となって、容易に撮れるようになった。

昔のカメラマンが自慢していた職人技は、今は殆どカメラ本体に組み込まれクリアーしてしまった。プリンターも性能向上でプリントの仕上がりも素晴らしくなった。

写真の機材がここまで進歩すると、写真の面白さは何か？と問われることになってきている。写真愛好家によって様々な意見があろうと思うが、以下は私の考えであるとおことわりしておこう。

私は趣味としての写真を、飽きること無く惹きつけられる要因として、自分が感動した事象を記録し楽しむこと、またその感動を人に伝え共有したいと思う気持ちを、どう表現するか思案すること、また非日常的な風景に出会うと写真にしたいことになること、何んといっても人間の喜怒哀楽を切り取っていくことに興味をもっていること等々である。

私はフィルムカメラ時代には暗室で作業したこともあり、自分なりの作品づくりを楽しんでいた。20年程前、縁があつて写真家の T 先生に出会い、しばしば「写真は創作だよ。映画もカメラマンの力量で作品のレベルが決まるんだ」と語り、私も写真は感動を伝えるためには演出もし、事物をしっかり観察して新しい視点で捉え、そして表現するものだと感じていたから、先生の考えに共感し、その鋭い感性に憧れて指導を仰ぐようになった。

T 先生は国際サロンに入選される程の腕前があつて、「写真をアートの世界へ飛躍させたい」という志向の人だった。画家の岡本太郎ばりに「芸術は爆発だ」と言う熱情型の人で、実にダイナミックな写真を撮られ よく観せてもらった。一昨年、米寿まで頑張られたが他界された。先生はフィルム時代の人だったから、私のようにフィルムからデジタルへ移る時代の者や、デジタルしか知らない若い人のように、デジタルアートとかイメージングフォトとか、新しい分野への関心が強いが、既にフィルム時代からやっておられた先生は、すごい人だったと思っている。

先生に少し近づいたかなと思いながら、私が近年撮った写真の中から比較的優しい作品を5点選んでみました。ご笑覧ください。

(1) 「鑑真和上望郷」

日本に戒律を伝えるため中国から何度もチャレンジし、盲目になりながらも日本への渡航を果たした鑑真に対し、その偉業をたたえて奈良時代に制作された鑑真座像（国宝作品）や、日本画家東山魁夷の障壁画を奈良唐招提寺で鑑賞した感動を、私なりに伊勢大王岬で撮った波濤の写真を重ね創作してみました。



(2) 「構える」

朝散歩中に近所の猫に出会い、背後からの斜光線を受け、自分の左手を広げて影をつくり右手でスマホのカメラで、猫が警戒して構える光景を、光と影を意識して撮りました。



(3) 「祈願の響き」

奈良信貴山の火渡り行事です。山伏と共に一般の人達が般若心経を唱和しながら、火渡りする姿と錫杖の振る金属音の響きが聞こえる臨場感を表現してみました。



(4) 「星空に奏でる」

大阪長居公園で開催されたイルミネーションを撮りに行った時のものです。星空とラッパを吹く人形が林立していたので、ロウアングルで親子をシルエットで捉え、ファンタジックに撮ってみました。



(5) 「夕焼け小焼け」

京都南部を流れる木津川に架かる「流れ橋」を渡る子どもたちを狙いました。夕焼けと陽が落ちる時間帯に子供たちがタイミングよく歩いて来てくれて幸運でした。

夕焼け小焼けで日が暮れて・・・が聞こえそうなメルヘンチックな世界になりました、



写真のモチーフは沢山あるようでなかなか見出すことはできません。それでも探し出す楽しみを味わっています。俳句や和歌からイメージを膨らませるのも面白いなと最近思っています。

最後に私からの提案です。題名の「カメラは健康器具」としましたのは、重い高級カメラを構えなくても、手のひらに入るコンパクトカメラを持って、体を動かし、頭を使い、気に入った写真を撮る楽しみが、張りのある生活に変える健康器具になるでしょう。

- ①外の空気を吸いながら、家の近くで四季の移ろいを撮ってみましょう。
- ②珍しいものを見つけるよう工夫し、よく観察してみましょう。
- ③誰も撮らない角度でカメラを向け異次元の世界をみてみましょう。
- ④記念写真でなく、身近な人の表情をこっそり撮ってみましょう。
- ⑤見慣れたものを光と影を意識して、生きがえらせてみましょう。

とりあえず、こんなところから始め、撮った写真を人に見せることが何より大切です。

おわり